



**Data**

監督: アニーシュ・チャガンティ  
 出演: ジョン・チョー/ミシェル・ラー/デブラ・メッシング/ジョセフ・リー/サラ・ゾン/スティーヴ・マイケル・アイク/リック・サラビア/ショーン・オブライエン

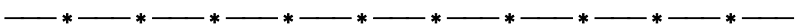
## 👁️👁️ みどころ

無声映画からトーキーへ。白黒からカラーへ。さらに35mmから75mmへ。

映画はそんな風に進歩してきたが、PC画面だけで展開する映画なら巨大スクリーンは不要！それなのに、あえてそんな手法を採った本作がなぜサンダンスで観客賞を？やっぱり映画はアイデアが大切だ。

若くして母親を失っても、この父親と娘の仲の良さなら問題なし。そう思っていたのに、娘が謎の家出、失踪、そして何と殺人事件にまで。担当の女刑事の献身的な努力によって犯人は検挙され、自白したが、その直後に自殺してしまったから真相はやぶの中に・・・。

ところが何と！何と！ラストに向けて事態は二転三転。そして、四転、五転。あっと驚くそんな怒濤の展開は、あなた自身の目でしっかりと！！



### ■□■このアイデアは斬新！サンダンスが観客賞を！■□■

映画検定の問題には作品、監督、俳優等を巡る映画の内容問題の他、映画制作の技術や歴史に関する問題もある。そこでは、①無声映画からトーキーへ、②白黒からカラーへ、③35mmから75mm等の巨大スクリーンへの3つが大きな変化だが、4番目には④フィルムからデジタルへの変化が入るだろう。70mmの巨大スクリーンは私が中学生の頃に日本で初公開されたが、その時はその迫力にビックリさせられたものだ。

他方、本作は2018年のサンダンス映画祭で観客賞を受賞した話題作で、チラシには「全く新しい映画体験＝100%すべてPC画面の映像で展開するサスペンス・スリラー」

と書かれている。そんな映画では巨大スクリーンはほとんど価値がないし、私のようにパソコンが苦手な老人には不向き。一瞬そう思ったが、「スピルバーグ、シャマランに次ぐ、映画の天才、登場！死ぬほど怖い。」等と書かれているチラシのうたい文句に惹かれて劇場へ。その結果は、マル！

## ■□■思い出がPCなら、会議もPC、父娘の対話もPC！■□■

本作の主人公デビッド（ジョン・チョー）の仕事はハッキリ描かれないが、それなりの会社員。しかし、PCで会議に参加している姿をみると、勤務時間は自由度が高いらしい。また、本作導入部ではデビッドが盛んにPCを操って過去の写真の思い出に浸るシーケンスが登場し、それによって、今は16歳になった一人娘マーゴット（ミシェル・ラー）の母親（＝デビッドの妻）が若くして病気のために死んでしまったことがわかる。

他方、デビッドは妻の死亡後は娘のための食事づくりをはじめ、家事もきちんとこなしているし、父娘の会話もフランクで2人の間は順調な様子。今日は、ゴミの始末を忘れていた娘を叱っていたが、会社勤めをしている父親がそこまで気付くのは偉いものだし、そんな父親の小言に素直に謝る娘も今ドキ珍しい。父娘の会話は朝出かける前と帰宅後はフェイス to フェイスだが、それ以外の時間帯はもっぱらPC（チャット）だ。父娘間でこれだけ頻繁にチャットのやりとりをしている風景は珍しいだろうから、母親死亡後のデビッドとマーゴットの父娘関係はある意味で理想的。しかも、そこにはデビッドの弟のピーター（ジョセフ・リー）が時々入り込み適当な変化球を投げているようだから、ますます世代間の共存がうまくできているらしい。スクリーンいっぱい展開されるPCの画面から私はそう思ったが、いやいや、実は・・・？

## ■□■一人娘が失踪！自力救済はダメ！すると父親は？■□■

本作導入部にみるデビッドとマーゴットは、気持ちが悪いほど仲のいい父娘。したがって、ある日の夜、マーゴットが家に帰っていないことに気づいたデビッドは、あちこちにメールと電話を。その結果、前から約束していたキャンプに行ったらしいことが判明したので、デビッドはひと安心だが、なぜマーゴットはキャンプのことを俺に報告しなかったの？また、マーゴットならキャンプ地から楽しさを伝えるメールか電話をするはずだが、それが無い。そこで再度確認してみると、何とマーゴットは友達と約束したキャンプに参加していないことがわかったから、アレ・・・。すると、娘は行方不明？失踪？誘拐？こりゃ警察に相談しなければ・・・。

一人娘の失踪がわかれば父親はどんな動きを？また、その捜査にあたる刑事はどんなキャラでどんな捜査を？これはサスペンス映画の1つの典型的なパターンだが、『プリズナーズ』（13年）では、警察が当てにならないと悟った父親は、法律で禁じられた「自力救済」による追及を始めていた（『シネマ 33』139頁）。また、韓国映画『ソウォン／願い』（13

年)『シネマ 33』145頁)でも、レイプ被害を受けた少女の父親は、「なぜ私の娘だけが？ いっそみんな同じ目にあえばいい！」と考える中で「自力救済」に走るようになっていた。

しかし、本作にみるデビッドは、担当とされた女刑事ヴィック (デブラ・メッシング) の指示に従ってしっかり必要な情報を提供し、警察の捜査を見守ったから、『プリズナーズ』や『ソウォン／願い』の父親とは違って理想的。しかも、自身のパソコン能力をフルに活用して娘のSNSに入り込み、娘の友人たちに片っ端から連絡を取って情報を集めたから、捜査はすぐに軌道に……。そう思ったが実は逆で、娘のPCを調査すると、デビッドにとって何とも意外なマーゴットの一面が次々と見えてきたからアレ……。マーゴットは毎週大好きなピアノの練習に通っていたはずなのに、デビッドに内緒で6カ月前にやめていたのは一体なぜ？ また、ピアノ教室の月謝(60分100ドル)を貯め込み2500ドルもの大金をある口座に振り込んでいたが、それは一体なぜ？ さらに、娘のSNS上には謎のハンドルネームの男が頻繁に発信していたが、この男は一体誰？ 今までデビッドは娘のことをすべて知っていると考えていたが、実は本当の娘の姿は何も知らなかったのでは？ デビッドは愕然！

## ■□■女刑事の捜査は？家出事件から殺人事件へ！■□■

父親とあれほど仲の良かった一人娘が突然家出！娘のPC上から出てくる父親の知らなかった一面をみると、なるほどそれもあり！結局、父親が知っていたのは娘の一面(表面)だけで、他の一面(本質)は全く見えていなかったわけだ。そう考えたデビッドは娘を拐かして家出に誘った悪い奴は誰？そう推理したが、ヴィック刑事の推理は父親のそれとは違い、もう少し客観的。つまり、失踪が長引いてくる中、単なる家出事件ではなく、誘拐事件や殺人事件も視野に入れて捜査したわけだが、それは当然だ。

ちなみに、第74回ベネチア国際映画祭で脚本賞、同年のトロント国際映画祭でも最高賞にあたる観客賞を受賞するなど各国で高い評価を獲得し、第90回アカデミー賞では主演女優賞、助演男優賞の2部門を受賞した『スリー・ビルボード』(17年)『シネマ41』18頁)では、7カ月前に娘をレイプされ殺された事件の捜査が一向に進展しないことに腹を立てた主人公のおばさんが、道路に並ぶ3枚の看板に「レイプされて死亡」「犯人逮捕はまだ？」「なぜ？ ウィロビー署長」と書いた広告をのせたことから生まれる人間ドラマを描いていた。このおばさんの行動は明らかに異常だが、本件だって、マーゴット消息が7カ月前にわからなければ、デビッドは警察の捜査にどんな不満をぶつけるかわかったものではない。しかして、結果はヴィック刑事の予想(?)どおり、失踪から数日後、悲しい結末に……。

## ■□■犯人はクラスメート？まさか俺の弟が？■□■

疾走から数日後、町はずれの湖の中でマーゴットが運転していたらしい車を発見！マーゴットの姿は発見できなかったが、お金などが発見されたため、全米のニュースでは急遽

殺人事件として報じられ、興味はその犯人捜しに移っていった。しかし、その動機は？怨恨？それとも痴情のもつれ？

デビッドの疑いは当初クラスメートに向けられていたが、ある日、車の中にあったパークのロゴがデビッドの弟・ピーターが大好きなものだったことがわかると……。そういえば、俺の留守中、マーゴットとピーターはいつも仲良くしていたナ。そう思ってマーゴットのPCからピーターとマーゴットがやり取りしていたメールをみると、何と失踪の前日、「あんな最高の夜はなかった。また今晚も行っても良い？」の文字が！さらにその続きには「勿論だよ。でもお父さんには言うなよ。殺されちゃうから。」の文字も！これは一体ナニ？まさか、俺の弟が……？

## ■□■犯人を発見！しかし、自白後に自殺を！■□■

『三度目の殺人』（17年）では、役所広司扮する強盗殺人の被告人の供述がコロコロ変わるため、福山雅治扮するエリート弁護士が振り回されるストーリー展開が面白かった。そして、そこでは14歳の娘がキーウーマンになるのがミソだった（『シネマ40』218頁）。他方、キムタクこと木村拓哉と二宮和也が先輩と後輩の検事役で共演した『検察側の罪人』（17年）は、後半からクライマックスにかけて、エリート検事がタイトル通りの検察側の罪人になっていく過程が少しバカバカしいけれども大いに見ものだった（『シネマ42』41頁）。

それに対して、本作ではヤク中の男がマーゴットを誘拐し、レイプし、殺害したと告白するビデオが公開されたから、事件は一件落着。そうなると、デビッドの悲しみはともかく、この解決はすべてヴィック刑事の懸命の捜査によること明らかだ。事件の捜査に協力していくうちにヴィック刑事もマーゴットと同じくらいの年齢の男の子の母親であることを知ったデビッドは、刑事としての職務と子育てを両立させているヴィック刑事に感心していたが、ホントにそんなことができるの……？

それはともかく、殺人事件を自白した犯人がその後自殺してしまえば立件はできないから、マーゴット殺人事件はヴィック刑事の功績大という結論でおしまい。後はマーゴットの葬儀をあげてやるだけだが、アレレ、デビッドはPCからさらに何かを調査中。デビッドは一体何を調べているの？

## ■□■二転、三転。四転、五転。その展開は自分の目で！■□■

今でも毎週土曜日のBSテレ東で放映されている『男はつらいよ』シリーズは、毎回新たに登場するマドンナを含めて、登場人物とその役割が最初から決まっているし、ストーリーの枠組みもかっちり決まっている。そのため、何もハラハラドキドキすることなく予定調和の展開を楽しめばいいわけだ。ところが、二転、三転、四転、五転するストーリーを売りにする映画では、その過程でのハラハラドキドキ感と、なるほどそうくるか！見事

にやられたナ！と思える“意外感”が大切だ。本作は、ここまでマーゴットの家出、失踪から殺人事件に、そして犯人の発見と自白、自殺と進んできたが、これにてジ・エンド？ いやいや、それではサンダンスで観客賞を受賞していないはず。しかして、本作のラストに向けてのハラハラドキドキの展開の中で見えてくる、意外な真相とは？

そのヒントは、それまで優秀な女刑事とばかり思っていたヴィックの隠されていた母親としての側面にある。デビッドとマーゴットはベタベタの父娘だったのに対し、ヴィックは一人息子との距離をきっちりとしているように思えたが、さてその実は・・・？ また、一人娘を思う父親の気持ちがデビッドのように大きいものなら、一人息子を思う母親、ヴィックの気持ちの大きさは？ マーゴットとデビッドの弟ピーターとの何ともアブなげなメールのやり取りが、単に“マリファナ”を吸うだけの関係だったのは幸いだが、マーゴットに父親への隠し事が山ほどあったことはその一事だけでも明らかだ。

マーゴットが殺されたのは、怨恨？ 痴情のもつれ？ さらに、カネがらみ？ それはわからないが、犯人の自殺後もデビッドがしつこくPCを調べているとアレレ……。ひょっとして、この犯人とヴィック刑事は知り合い？ さらに、ヴィック刑事は任命されて本件の担当刑事になったとっていたのに、ホントは志願したらしいことも判明。こりゃ一体ナニ？ さあ、本作ラストに向けての“ネタバレ絶対禁止”の展開は、あなた自身の目でしっかりと！そして、『ワイルドシングス』（98年）（『シネマ1』3頁）や、『キサラギ』（07年）（『シネマ13』61頁）と同じような“怒濤の推理”をしっかりと楽しみたい。

2018（平成30）年11月19日記